中国における日本語教育の移り変わり

日中国交正常化によって本格化した中国における日本語教育。その創成期に「大平学校」が果たした役割、興隆期をむかえ始まった国家級事業「教育大綱（シラバス）」の整備、そして、改革開放に伴って生じる学習者の多様化など、日本語教育三十五年の歩みを振り返り、これからの中国の日本語教育のあり方を語りあう。

佐治圭三〈京都外国語大学名誉教授〉×李翠霞〈愛知学泉大学経営学部教授〉×顧明耀〈愛知大学現代中国学部教授〉　司会　劉柏林〈愛知大学現代中国学部教授〉

劉　佐治先生、李翠霞先生、お忙しい中ようこそ愛知大学へいらっしゃいました。本日は、佐治先生、李先生、顧明耀先生から中国の日本語教育についていろいろとお話を聞かせていただきたいと思います。

ご承知の通り、一九七二年九月二九日、当時の周恩来首相と田中角栄首相が歴史的な「中日共同声明」（日中共同声明）に調印し、中国と日本は国交を結び戦後の不正常な関係にピリオドを打ちました。以来約三〇年間、中国では日本語のブームは衰えることなく続いております。私自身は国交正常化直前に日本語の勉強を始めたのですが、当時、日本語の教科書・参考書は北京の新華書店でも数えるほどでした。まず、北京大学の陳信徳先生編著の『現代日語実用語法』上下巻、中国では初めて日本語の文法を文の構造から研究した本です。そして北京大学が出版した黄色い表紙の『大学日語一年級用』という教科書、それから北京対外貿易学院の陳濤先生主編の『日漢辞典』、李統漢先生の『日語句子結構分析』しかなかったのです。最初の三冊はいずれも新中国誕生十周年の一九五八年から五九年にかけて出版されたもので、『日語句子結構分析』は一九六〇年に入ってからの出版です。四冊とも私の学生時代のもっとも印象深い本です。

最近の文献によると、日本語の使用人口は一・二億人で世界第九位となっています。一位は中国語で一〇億人余り、二位は英語の三・五億人、三位はスペイン語二・五億人、四位はヒンディー語約二億人、五位はアラビア語一・五億人で

す。しかし、中国における外国語学習者人口は、この順番ではありません。日本語は英語についで第二位です。国際交流基金の調査によると、二〇〇三年度の中国の日本語学習者人口は三八万七九二四人です。そのうち、高等教育での学習者は約二〇万五〇〇〇人（九八年には九万人）で、初等・中等教育の学習者は約七万九〇〇〇人です（九八年には一一万六〇〇〇人）。学校教育以外の日本語学習者は一〇万人ですが、注目していただきたいのは、高等教育の学習者と学校教育以外の学習者の数が増えたことです。高等教育での学習者は五年で倍増、学校教育以外の日本語の学習者は三倍増でした。中国の日本語学習者は毎年増えているように感じます。そこで、諸先生方には、過去を振り返りつつ、これからの中国の日本語教育のあり方についてご意見などをお聞かせいただきたいと思います。

日本語教育との出会い

劉　では、まず佐治先生から中国で日本語教育を行うことになった経緯をお聞かせいただきたいのですが、先生が初めて中国にいらっしゃったのはいつ頃ですか。

佐治　一九七九年だったと思います。私はもともと国語の教師でした。大学で国語国文学を専攻していたので、卒業後、高等学校の国語教師になり、それから一二年目くらいに大阪外国語大学から、日本語教育をやっているからここへ来て教えないかと声がかかったのです。田舎の高校でのんびり暮らしていましたので、都会へ出て三人の小さい子どもたちを育てていく自信が無かったのですけれども、一方では新しい経験もしてみたいということで引き受けて、大阪外国語大学の留学生別科に着任しました。それが一九六七年四月です。それから、日本語教育と言われる領域にかかわっていくことになるわけです。

最初は、高等学校の国語と比べたら入門の日本語くらいわけないと思っていたのですが、実はそうではありませんでした。全国日本学士会の会誌『アカデミア』九五号（テーマ「グローバル化の中の日本語の意義」二〇〇五年一二月）にも書きましたが、少しだけ説明しますと、あるとき漢字の入門の授業の時に、「これは山という字です。こう書くのです」とか「これは川という字です。こういうふうに書くのです」とか言って教えていたら、一人の学生が「先生、ノデス、何ですか」と質問してきたんです。私は黒板に字を書きながら「こう書くのです」と発音していたのですが、意識して言っているわけではないので、その「ノデス、何ですか」という質問自体が、何のことを聞かれているのかわからなかったのです。

やがて「山という字」―「山」「という」「字」、「こう」も「書く」も分かるけれど「書くのです」の「のです」だけわからないと学生が言っているのだとなんとか理解しました。しかし、一二年間高等学校の国語の教師をしていて、そんな質問を受けたことが一回も無いので、考えたこともないし、さっぱり分からない。そこで当時はやっていた言葉ですが

佐治圭三[Saji Keizo]

長年日本語教育に携わる日本語教育の先駆者的な存在。北京語言学院（現北京語言大学）にあった「全国日語教師培訓班」（日本語研修センター、通称「大平学校」と呼ばれた）の主任教授を五年間担当、中国人日本語教師の養成に大きな貢献をした。

「気にしない、気にしない」と言って教室から逃げて帰ってきたのです。それが日本語教育でぶち当たった最初の困難でした。

それから、私は「のです」についていろいろと考えてきて、今では一応「のです」について説明もできるような状態に到達しております。私だけでなく、多くの先生方の「のです」「のだ」という形式についてのご論考などを参考にしながら、研究者の間である種の同意が形成されつつあると言うことができると思います。

中国の日本語学習者との出会い

佐治　そうして大阪外大で十年ばかり日本語教育にたずさわった後、中国から初めて留学生がやってきました。国交回復は七二年ですね。そうすると七四年くらいです。七三年くらいに東京外大に初めて留学生が来て、その明くる年が大阪外大で、七人ばかりでした。その当時来たのはみな男子ばかりでしたが、初めて中国の留学生に接して、一生懸命に勉強するし、明るいし、はつらつとしているし、非常に好感を持ちました。その後、大阪女子大に職場を移してからも、大阪外大の中国の学生たちに対する日本語教育は続けていました。ですから中国の学生に対する日本語教育は、中国に行く二、三年前からやっていたことになります。

一九七八年に、阪田雪子先生をはじめとする先生方が初めて国際交流基金主催の巡回指導（中国の大学の日本語の先生に対する講座）を北京でなさいました。それが非常に好評で、続けてやってほしいという要望があり、二回目の七九年の夏休みに私も巡回指導に行きました。それが中国に行った最初です。メンバーは、文字表記の専門家の天沼寧先生、生成文法を日本に輸入した一人である奥津敬一郎先生、川瀬生郎先生、国松昭先生、斎藤明先生と私の六人です。

私たちは甲班と乙班に分かれ、私は乙班に属して、まず最初に上海で五〇名くらいの方に、その後、長春でやはり五〇名ばかりの方を対象として、日本語・日

本語教育について約三〇時間の表記、文法、発音などの講義をすることになりました。受講生はみな大学の先生、あるいは大学の先生と同じような立場にいらっしゃる先生方だという説明を中国側から聞いていました。会場の上海外国語学院に行ってみると、なるほど教室に出てくる人は五〇名そこそこなのですが、あと一〇〇名ばかりの若い方々やあるいはもっと年をめされて講座に直接出ることのできない方々が一室を占領してそこで聞いておられて、聴講生として一〇〇名ばかり、長春、吉林でも同じくらいの大勢の人が聞いてくださいました。私は文法を担当していましたが、非常に熱心に聞いてくださって、質問にも来られたし、また、演習では、誤用例の分析を発表してもらったこともありました。何しろ文革の後で、日本へ行ったことがないし、日本語を母語とする人から直接教えてもらったこともないといった方がかなりいらっしゃいました。年配の方のなかには、日本の大学を卒業して、日本語の運用にはなんら心配のない方もおられましたが、若い方はかなりの差がありました。正規の五〇名の受講生の中にも、論文でも何でも書けるような方とまだまだ日本語の勉強そのものをしてもらわないといけないような方と、非常に差があったわけです。しかし皆さんとても熱心で学習意欲旺盛だということだけは共通していました。

大平学校開校へ

佐治　巡回指導から帰って、我々は、たぶん口をそろえてだろうと思うのですが、「中国では今一所懸命にたくさんの人が日本語を勉強しようとされており、先生方もそれに応えるべく一所懸命に頑張っておられる。けれども教える学生がどんどん増えているので先生の方もそれに追いつかなくて、なかなか自分の勉強ができないで困っておられる。だからそういう先生方のための再教育機関をつくって、十分にご援助もうしあげないといけない。我々日本民族が生き残っていくためには、どうしても心を通じ合える友達を中国に作っていくよりほかにないんだ」というようなことを報告書に書いて、国際交流基金やら大阪府知事やらに発送したことがありました。その年の暮れに大平総理が中国に行って二つの提案をしてこられたのですが、その一つが「日語教師培訓班」（日本語教育研修センター）いわゆる大平学校です。日本語の先生方のための再教育機関で、先生方に一年間勉強してもらって、その一年のうち一か月、これが非常に大事なことですが、日本に来て実情を見てもらうということを提案されて、中国側も「それはよかろう」ということになったわけです。

その当時、私は大阪女子大学の教師をしていたのですが、北京大学から一年間日本語の講師をしないかという話をもらい、「できたら行きたい」と国際交流基金の日本研究部長だった椎名和男さんに相談したところ、もし行くなら大平学校の日本側の責任者を引き受けてくれないかということで、若造であるのに日本側主任という名前をいただいて、何の心配もなく出ていったわけです。けれども、実は日本語についての教育が非常に難し

いということを知る二回目の経験でした。日本語を教える先生にどのようにしたら力をつけてもらえるか、立派な日本語の使い手あるいは教え手になっていただけるか、非常に難しい問題に取り組むことになったわけです。

国際交流基金では、金田一春彦先生、木村宗男先生、阪倉篤義先生、宮地裕先生、渡辺実先生、林大先生、玉村文郎先生、野元菊雄先生などの先生方に協力をお願いして、このプロジェクトの支援と諮問のための委員会を作ることになりました。

この計画を取り決めてきた大平さんのことばに「人と人とのつながりが密接でなければその友好は架空の楼閣だ」という部分があることを聞きまして、まさにその通りだ、それができたらあとはどうでも良いというような気持ちで、一九八〇年四月に大阪女子大学を退職し、七月末に北京へ赴任したのです。

大平学校の日々

佐治　大平学校は、一期（一年間）一二〇名、五年間で六〇〇人ですが、一期生の人たちはみな非常に熱心で、炯々たる眼光というか爛々たる眼光というか、ものすごく鋭い眼光を覚えています。ちっとも手を抜けない、ちょっとでも手を抜いたらすぐ突っ込んできて、分からないと立ち往生してしまう。大学を出て二、三年あるいは四、五年という若い先生たちは日本語の教師としては経験がありますが、日本語の先生の先生としての経験はありません。そういう人たちの中には、もうこんな怖いところにはいたくない、帰りたいと言いだすくらい授業が大変だった人もいて、それならみなであらかじめ勉強してから教壇に立ったらいいんじゃないかと提案したり、とにかく大変な努力をしながら一年間が経ったのであります。しかし、その強烈な一年は何といっても、日本側も中国側も熱い一年で、修了式では互いに涙を流して再会を誓うというような、今思い出しても感動がよみがえってくる一年でした。

二期生は、非常に冷静沈着で確実で、きちんと勉強してくる、そういう人々でしたね。三期になると、だいぶ様子が違って、中国自体がかなり緩和してきたのでしょうか、開放政策が進んでいったんでしょうか、四期になると、論文を書くことが非常に上手な人たち、つまり大学の教師として単に日本語教育、実地の教育にあたるだけでなく、行く手を自分たちで切り開いていくことのできるような能力をもった若い人たちがやってきました。五期生は、わりにほんわかムードで、もう完全に改革開放の成果を身につけた若者たちでした。そうして五年間が過ぎ、大平学校そのものはそこで閉じたのですが、その後を引き継いで日本学研究センターという形で北京第一外国語学院を会場に行われることになって、大学院生を出していくことになりました。その大学院生の中にも大平学校の卒業生が何人も入っていきました。

去年（二〇〇五年）の秋に大平学校開設二十五周年、日本学研究センター開設二十周年記念のシンポジウムが行われ、私も招待を受けて、いろいろ話を聞かせてもらったり、二、三発言をしたりした

のですが、日本語、日本文化、日本社会研究のすばらしいシンポジウムを中国の機関が自分たちの力で企画し、運営し、そして発展させていくという、私が初めて北京に来た時と雲泥の差の実力を日本研究者たちは持っている、その象徴が日本学研究センターであると思いました。シンポジウムの後、徐一平さんに言われて懇親会の席上で挨拶をしましたら、多くの大平学校卒業生が集まっていて、すごく感激しましたし、その人たちもすごく感激してくれていたようで、久しぶりの再会を非常にお互い嬉しく思ったのであります。

交流がもたらしたもの

劉　今から考えれば本当に意味深いですね。大平学校出身の研究者の方々はあの頃のことをずいぶん懐かしく思われているようですから、言語文化から始まる人と人とのつながりというのは大切ですね。佐治先生は最初に人と人とのつながりを持った友好をなさったわけです。大平学校には日本から毎年二〇名くらいの先生方がいらっしゃいました。二期のときに、私は大平学校の教務の担当で連絡係をやっていまして、日本の著名な先生方に接することができました。先ほどお話にあがった金田一春彦先生は、優しい方で、中国の学生に対してとても熱心でした。

特に忘れられないのは、北京大学の公開講座で、金田一春彦先生が「は」と「が」について急に質問されまして、どういうふうに説明すればよいか、先生が初めて立ち往生された様子を見たことです。でも先生はその公開講座の後、日本に帰ってまもなく「は」と「が」についての本を出され、大変感銘を受けました。こうした交流を通して、日本語学そのものも学術的に高まったのではないかと思われます。

佐治　そうですね。お互いに切磋琢磨でして、もしあのような機会が設けられなかったら、日本における日本語教育の内容も進まなかったと思います。ああいう機会にいろんな人が行って、そこで実際に行き詰って、立ち往生して「これは考え直さないとだめだ」といって勉強したということですね。もう一つ、徐一平さんに聞いて非常に嬉しかったのは、公開講座が現在の日本学研究センターでもずっと続けられているということです。公開講座というのは何をやるかわからないのに、当時の中国でよくやらせてくれたなと思います。せっかく中国まで来てもらったのですから、講師の方に何か言いたいことを言って帰ってもらいたいと思って公開講座を提唱したところ、中国の指導者の方にＯＫをいただけたのです。それが現在も続いているということは、本当に開かれた関係がずっと続いていたということです。お互いの信頼関係で成り立っているわけです。今の政治の責任者たちが、特に個人名は言いませんが、日本のある人は非常に頑固で、いちばん大事なことを見失っていると思うのですが、それはきっと是正される、やがて解決されていくと思います。

劉　そうですね。日本語教育を通じて日中友好というか中日友好が深められて、人々の心まで暖められました。今、中国

の日本語教師には、先生方に感謝の気持ちでいっぱいという人たちがたくさんいると思います。中国でも大平学校は高く評価されています。

北京の日本語教育事情

李　佐治先生のお話をお聞きして、中国における日本語教育の歴史を振り返ったような感じで、とても懐かしく思いました。また、先ほど劉先生のお話にあった陳信徳先生の文法の本と北京大学の一年生の教科書、あれは私も毎日のように使っていました。それに、もう一つ付け加えたいのは、愛知大学編纂の『中日大辞典』です。今日私が愛知大学に来ているから言うのではなく、他の場でも何度もお話ししていることですが、日本語を教え始めた頃に、北京第二外国語学院の日本語研究室にたくさん送っていただき、本当に助かりました。それからも改訂のたびにいただいています。とても厚い本で、改訂するごとに新しい言葉がたくさん入っていて、学生に教える際にいろいろ役に立ちました。ほかにも新語辞典、政経辞典などいろいろありましたが、そういう辞書や教科書が次々に出版され、また立派な日本の先生が中国に来て教えてくださったからこそ、今日の中国における日本語教育があるのではないかと思います。

劉　『中日大辞典』は中国ではかなり愛用されていて、愛知大学の教員としても嬉しいです。

ところで、今、中国の日本語学科の学生数は、私の学生時代よりもだいぶ増えていますが、あの頃は一学年三クラスで一クラス一八名でしたが、今はどうでしょうか。

李　今は一クラス二八～三〇名です。正規の学生が四クラスで、ほかに進修生も二クラスくらいとっています。中国では一九九九年から大学の募集定員を広げました。どのような専攻の学生を増やすかも国が決めたのですが、その中に英語はもちろん日本語も入っているんです。その点から見ましても一九七二年の国交回復以来、三十数年になりますが、やはり日本語の愛好者は多く、国にしても日本語が必要だということが分かります。日本語教師としてとても喜ばしいことだと思います。

最近では、学生の保護者の方も日本語か英語を学ばせたいと希望しています。経済貿易学部、法学部などの学生が外国語を学ぶ場合、大多数が英語か日本語を選びますし、英語学部の第二外国語では九〇％くらいが日本語を学びます。ですから、日本語専攻の学生、それから日本語専攻ではないけれど何らかの形で日本語を選ぶ学生は確かに増えています。

ですが、教師の数はそれほど多くなっていません。北京第二外国語学院の場合、学生は三倍にはなっていますので、教師は大変ですし、教師のレベルを高めることが大事だと思います。それで、思い起こすのはあの大平学校ですね。あのような機関がもっとあってほしいという気持ちです。もちろん、最近は留学や研修で日本に来て勉強する機会はありますが、それと大平学校のような中国人日本語教師を養成するための学校とは違います。若い教師はなおさらそう思っている

李翠霞[Li Cuixia]

北京第二外国語学院で、日本語専攻学生の教育に長年携わる。また、1975年から数年間、北京人民放送局の日本語ラジオ講座の講師を担当、当時日本語を学んでいた北京市民には大変良く知られた存在。

と思います。

また、今は学校教育以外でも、いろいろな人が日本語を勉強しています。目的も様々です。例えば、職場によっては日本語のレベルで待遇が変わり、日本語能力試験一級の合格証書があれば二〇〇元、二級なら一〇〇元と給料も高くなります。日本語と英語の両方とも最高レベルの合格証書であれば四〇〇元です。ですから保護者は家庭教師をつけてでも日本語を勉強させたいんです。北京ではいたるところに「日本語学びませんか」、「日本語研修班一か月××元」などとあって、日本語教師としては喜ばしいことだと思います。

劉　なるほど。教師のレベルのお話ですが、今の中国の日本語教師のレベルは昔に比べ大分高くなったと思いますが、教授法などの研究はまだ足りないと思われますか。

李　足りないですね。それに、学生のレベルも高くなっているんです。以前の中国はあまり門戸が開かれていませんでしたので、学生も外国語についてあまり分からない状態でした。でも今は、外国語学校などで何年も日本語を勉強した人が入学してきます。また、改革開放でご両親が日本で働いていて、お子さんも二、三年日本にいると、日本語は上手になるし、日本事情にも詳しくなります。そういう人たちが中国に帰って大学に入学してくる場合など、教えるのが難しいんです。ですから、教師のレベルがもっと高くならないと今の社会の要求に応じられないというのが現状です。

劉　今の若い人は日本からビデオやテレビドラマや本などたくさん入ってきているから、いろいろ勉強できるんですね。私の時代は録音機だってかなりの大きさでした。

顧　私の時代にはそれさえ無かったです。

李　それに、今ではみなパソコンを持っていますから、インターネットで日本の朝日新聞のasahi.com（http://www.asahi.com/）などにアクセスすれば、日本の状況が分かるんです。ですから、今の教師は日本語ができるだけでなく、必ず今

の日本の状況、世界の中の日本の姿などが分からないと教えられないのです。

劉　教師に対する要求が大分高くなっていることがわかりました。

佐治　時世に対応したものを常に考えていかないと。

劉　そうですね。

非専攻の日本語教育の発展

劉　では顧先生から、非専攻の日本語の学生についてご紹介いただきましょう。顧先生は定年までずっと西安交通大学にいらっしゃいましたね。

顧　西安交通大学では二〇年前、一九八五年に日本語学科ができました。北京第二外国語学院のようなレベルの高い日本語学科とは比べられませんが、一応、特色ある日本語学科です。それと同時に非専攻の日本語の学習者がとても多いのも特徴です。私が西安交通大学を離れたのは約十年前ですが、毎年第二外国語として日本語を勉強したい人は、たぶん千人くらいいました。しかし、教員の数が足りなくて、百人の大きな教室でやってもせいぜい四百人くらいしか履修登録できません。後の人はこっそり教室に来て聴講するしかないのです。それが十年前の様子です。今は変わったかどうか、実は昨日電話をして聞きましたが、変わっていませんでした。

また、武漢市には華中科学技術大学（旧・華中工学院）という非常に有名な大学がありまして、そちらにも電話で第二外国語の日本語の様子はどんな感じか聞きましたら、授業時に通路に立ってでも聴いている人がいっぱいいるそうです。ですから国際交流基金の統計は、率直に言いますとあまり正しくないように思います。この統計は中国の日本語学会にやってもらったものですが、日本語の専攻の方は割合に正確に統計できますけど、非専攻の方は難しいのです。どういう大学が非専攻を持っているかについて調査者はあまり詳しくないですし、それに先ほどお話ししたように、こちらは四百人のクラスでやっていますが、実際は千人くらい聴講しています。ですから私たち非専攻の大学でも統計できないのが実情です。そのため、高等学校の学習者数はこれよりも多いと私は信じております。

私は非専攻の日本語を教えてまいりましたが、実は私自身も非専攻の出身です。一九五七年に北京対外貿易学院に入りました。専門は対外貿易でしたが、対外貿易を学ぶにはもう一つことばを習わなくてはならないという規定があって、私は日本語を習ったんです。当時、私たちのクラスは一〇人です。先生は五人で、主任の陳濤先生をはじめとし、汪大捷先生、金鋒先生、張厚璁先生がいらっしゃって、もう一人藤田恵美先生が唯一の日本人でしたが、今のことばで言えば残留孤児です。六二年に大学を卒業して、西安交通大学に配属され、西安交通大学に行ったら、日本語を教えてほしいと言われたんです。ですから、私は非専攻の日本語教育を受けて、非専攻の日本語を教え始めたのです。

佐治　大変なことですね。

顧　勉強しながらやりました。勉強する本も、先ほどの陳信徳先生の文法書しか

ありませんでした。当時はまだ日本のラジオを聞いてはいけない時代でした。聞いたらいわゆる「偷听敵台」（敵の放送を盗み聞く）と言われる恐れがあります。日本語の本も全然ないし、何か質問したくても相手がいません。実は、本格的な日本語の専門家に会ったのは佐治先生が初めてです。普通に日本人とコミュニケーションをしたのは一九八〇年のことです。日本語を学び、教え始めてから二〇年です。

李　外国人教師はいなかったのですか。

顧　西安交通大学は、重点大学と言っても当時は理工系だけです。日本語の外国人教師は日本語学科を設置した八五年から招聘し始めたのです。それまでは外国人教師も日本語専門家もいませんでした。まさにこういう状態で、日本語を勉強し、教えてきました。日本語の論文も書かせていただきましたが、今見たら恥ずかしいものです。

劉　顧先生が一九六二年に西安交通大学に行かれた頃、日本語を習う学生は何人くらいいたのですか。

顧　赴任してすぐ私が教えていたのは、学生ではなく教員でした。当時の教員は、英語とロシア語はみなできます。それで第三外国語として日本語を習いたいということでした。みな偉い先生ばかりでした。教材は自分で編纂して、自分でガリ版で刷って配っていました。

当時の学生は、第一外国語がロシア語です。私も中一から高校までロシア語でした。ですから、大学でも第一外国語を続けるならロシア語で、もし第二外国語を習うなら決まって英語です。学生が日本語を第二外国語として選ぶことはごくわずかです。西安交通大学が学生の第二外国語としての日本語を設置したのは一九六四年で、これは全国でも早いほうだと思います。要するに、プロ文革前に日本語を第二外国語として設ける大学は全国的にもまれでした。

シラバス・指導要領・教材

顧　プロ文革が終わって、一九七七、七八年ごろでしょうか。鄧小平さんが講演の中で何回も、しっかりかつ急いで教育のことをやろうとおっしゃいました。それによって全国的に教育のこと、教材のことを真剣に考えるようになりました。日本語教育もその中の一つです。西安交通大学は、日本語授業を開設したのが最も早い大学の一つですから、その頃から私も全国のことに携わらせていただきました。

私が最初に日本に来たのは八五年で、一年間、国立国語研究所で宮島達夫先生について日本語語彙論を勉強しました。当時、中国では日本語語彙論をやる人はあまりいなかったので、これから語彙をやろうと思っていました。しかし教育部のほうから、全国の教育を考えた日本語教育をやりなさいと言われ、まず、「教育大綱」の作成を依頼されました。指導要領に当たる教育大綱です。専攻は徐昌華さん、非専攻は私が組長で、どちらも同じ時期に作りました。日本では各大学で目標や教授法を決めますが、中国では教育部主導です。教育部が統一的なものを作って公表し、全国の各大学は大体それに沿ってやります。

顧明耀［Gu Mingyao］

西安交通大学で「大学日本語」（日本語専攻ではない学生の日本語）教育に30数年間取り組む。1985年から中国の日本語教育大綱の制定組長、中国の大学外国教材編集審査委員会の委員、大学外国語教育指導委員会副委員長兼日本語部会長、非専攻外国語試験委員会の委員などを歴任。

八九年に教育大綱ができて、指導方針はちょっと変わりました。これ以前の日本語教育は、特に非専攻では基本的に閲読中心でした。日本人に接する機会もまったくなくて、学生はあまりしゃべれませんが、科学技術者としては資料を読むことが大切ですからそれでよいという認識でした。八〇年代後半の教育大綱の教育目標は、閲読能力を一番高く設定して、次は翻訳能力と聞く能力で、話す能力と書く能力はさらに低く設定したのです。読解ばかりではないですけれど、読解は中心の中心で、コミュニケーション能力は一番下、初歩的なものという設定です。

しかし、この大綱は過渡的なもので、もう時代遅れではないかと思います。今の中国と日本の交流は閲読だけでは足りません。新しい教育指導要領はまだできていませんが、方針としてはやはりコミュニケーション能力を重点に置くと思います。

次に教材ですが、今日は二種類もってきました。こちらは『大学日語』という教材で、中・高で日本語を勉強して大学に入った学生向けの教材です。教育指導要領に沿って作った教材で、閲読中心で、ある程度のコミュニケーション能力を視野に入れたものです。

こちらは『新大学日語』という教材で、もっとコミュニケーション能力を重視した新しい教材です。国際交流基金の助成金をいただいて二〇〇二年に出したものです。全部で一〇冊ありますが、一冊目の編者の中に大平学校の出身者、翟東娜さんもいます。徐曙さんも大平学校です。新しい教育指導要領はまだ出ていませんが、こうした教材の内容から見ても教育の目標から見ても少しずつ変わってきています。佐治先生、李先生のお話の通り、学生のレベルは昔より大分高くなりました。また、勉強の手段も大分昔と変わりました。そういう事情を含め、この教材はいろいろな角度から見て新しいと言われています。

佐治　ずいぶん新しいです。

劉　このテキストは、今どのくらいの大学で使われているのでしょうか。

顧明耀・徐祖琼主編『大学日語』高等教育出版社、1991年

陳俊森総主編『新大学日語』読解・作文編／聴解・会話編、高等教育出版社、2002年

顧　中・高で日本語を習ってきた学生を対象にしたものなので、そうした学生がいれば、ほとんどこの教材を使っているそうです。

李　これはもう昔のものとは違いますね。高等教育出版社出版ですから、確かに全国的に使われているでしょう。

劉　非専攻の日本語教育は、統一されている感じですが、日本語学科の場合は各大学それぞれ独自のテキストがありますね。

顧　要するに、日本語学科を持っている各大学にはレベルの高い先生がいっぱいいらっしゃるから自主開発できますが、非専攻の大学は教員が一人か二人の場合が多く、何か作ろうとしても難しいのです。

李　最近は日本語関係の本もとても多くなりました。新華書店の日本語コーナーには、英語ほどではないけれど、いろいろな人がいろいろな本を出しています。けれどもこのように統一された国家級レベルの権威のあるものは少ないです。

中国人のための日本語教育を

顧　これからの日本語教育では、中国人のための日本語教育とはどういうことかを考えなければならないといつも感じています。今の日本語教師は、私の学生時代はもちろん、私が教員になったばかりの時よりも大分レベルが高くなりました。日本で修士や博士号を取って、中国で日本語教師をやっている先生も多くなりました。これはとてもいいことですが、もう少し中国人が日本語を習う時の特色を考えてほしいです。例えば、日本で生成文法を習った方は、中国に帰ったらまた生成文法をやり、ヤマダ文法やワタナベ文法を習ったら、またそのまま持ち帰ってやります。研究も教育も大体こういう傾向があります。教材を見ても、やはり同じ傾向があると思います。その研究のいいところを吸収して中国人を対象に活用する、という考えがまだ足りないと思います。中国人に教える場合は、日本人のためのいわゆる国文法とはもちろん、他の外国人のための日本語教育とも違うところがあると思います。文法でも表現法でも、どういうところを重点に教えなければならないか、どういうところはそれほど重点にしなくてもいいか、どう説明したらもっと分かりやすいか、どう教えたらもっと効果的だろうか、などをもう少し考えてほしいです。

劉　中国人が日本語を勉強する場合、漢字はそんなに力を入れなくてもいいけれど、表現とか言葉遣いには、微妙なところで誤解を招くものが結構多いと思います。例えば、日本語では何かを断る時にはかなり婉曲的な表現で断りますが、中国人の習慣としては先に「不」――Ｎｏを言います。ですから、中国人の断り方はストレートという感じ、「強い」と言われますね。言葉の勉強は、一定の段階になると、コミュニケーションの文化を背景にした方法論が必要だと思います。中国人の学生が何を教えてほしいと望んでいるか、諸先生方はよくご存知だと思います。これからの中国における日本語教育に対して、何かご助言はありますか。

佐治　みなさんがおっしゃっているように、どういう部分に重点を置くかが大きな問題だと思います。それをしっかり調べて知るということがまず最初にやるべきことでしょう。例えば、非専攻の理工系の学生たちが日本語を使っていく場合にどういうところに支障が起こるか。中国の日系企業に勤めている人もいるでしょうし、日本に来ている人もいるでしょうから、それを調べて取り出していくのは難しいけれども、まず中国の先生方を中心にそういうチームを組んで、調査をして「知る」ということです。その上で、それにのっとったカリキュラムを立て教材を作っていくということが必要ではないでしょうか。

劉　今、日本から何万社という企業が中国に入って、合弁企業や独資企業をやっていますが、従業員のほとんどが日本語ができないという現状です。日本語のできる人は一つの工場にせいぜい二、三人ですから、まだまだ日本語のできる人材が足りません。ですから、これからの日本語教育では日系企業で働く人たちを一つのターゲットに考えたほうがいいです

ね。非専攻の学生たちは、理工系の技術を持ってさらに日本語で日本の技術者と直接コミュニケーションが取れれば、企業にとってもいいことだと思います。

進路を見据えた教育を

劉　日本語学科の学生のここ数年の就職はどうでしょうか。

李　選ばなければ、就職は百パーセント大丈夫です。今のところ中国では外国語を学んだ人で就職できないというのは無いです。

劉　やはり中国のマーケットはかなり大きいですね。

李　日本語専攻を持っている大学も非常に増えて三百近くあります。

劉　インターネットの資料では、全日制大学で日本語学科がある大学は六百、在校生は一六万人だそうですが。

顧　たぶん、李先生のおっしゃった数字が正確だと思います。でも、三百校の日本語専攻の卒業生の就職は、そのうち問題になると思います。やはり日本語専攻もそれぞれに特色を持たなければならないと思います。西安交通大学の日本語学科はまだ二〇年ですが、就職率は非常に良いです。十年前までは毎年二〇人の卒業生に対して、求人は二百くらい来ているので、選ぶ余地がずいぶんあります。それは、西安交通大学の場合、日本語学科の卒業生はもちろん文学士ですけれども、募集は理科系からしてきたからなのです。学生は高校時代に数学や物理が得意で、大学に入ってからも自然科学を勉強します。コンピュータや英語にも力を入れています。学生が就職しやすいのは、そういう力を活用できるからだと思います。いくつかの日系企業は毎年決まって西安交通大学から何人か採用しています。外語大学の卒業生は採用しないでもっぱら交通大学の学生を採用する企業さえあるそうです。理科好きの学生だったら工場に行ってどんな技術にもそのうちにすぐ慣れるし、専門の通訳も割合に早くできるようになるからだそうです。

李　ですから今、「外国語は道具でしかない」とみなよく口にします。二、三〇年前なら日本語が少しでもできれば偉いと思われたけれども、今は日本語ができるだけではだめなんです。非専攻の学生のレベルが最近とても高くなってきていますから、日本語専攻の学生も頑張らないと、優位性がないんです。ですから、外国語が道具だと言われているのです。

北京第二外国語学院では、法律学部、経済貿易学部、観光マネージメント学部の先生方に全学向けの選択科目を作ってもらい、日本語学科や他の学科の学生たちも選択できます。そういう専門知識も少しは勉強させるという方法を十年くらい前からやっています。それに、日本語専攻の学生は必ず英語も勉強することです。英語プラス何かの専攻、例えば経済とか。もちろんちゃんと日本語ができた上です。そうでないとどの会社も受け入れてくれません。今のこういう外国語の存在は、今のデジタルカメラの立場のようなものだと思うのです。デジカメはもともとは立派な独立した製品でしたが、最近は携帯電話にも高精度のデジカメが付いています。携帯から見れば、デジカ

メは一種の付属品にしかすぎない存在になってしまいました。外国語が道具でしかないというのはまさにこの意味です。昔は外国語専攻だけでよかったけれど、今ではデジカメのように、他の専門の付録になっている状態だと思うんです。ですから、外国語の教師も、学生に英語や専門知識を要求するからには、自分も相応の知識がなければならない、大変な現状なのです。

佐治　今の北京の日本学研究センターは、いわば文系の日本学の最高峰的に存在していると思いますが、中国にもう一つ理系のものをベースにした日本語の研究も必要なんじゃないでしょうか。

劉柏林[Liu Bailin]

李　もう一つ感じたことは、言語の時代性です。私が最初に留学した時には「七時のニュースです」でしたが、今は「ニュースセブン」です。それは別としても、最近はライブドアのニュースがたびたび報道されていますが、中国ではあまり訳されていませんでした。それが最近「活力門」（ホーリーメン）と訳されて新聞に載っていました。確かにライブドアだなと思ったのですけど、時代によっていろいろ言葉が変わるので、それに教師がついていけないと、学生に、特に留学経験のある学生には負けてしまいます。今は公費でも私費でも日本に来る学生がたくさんいます。うちの大学でも交換留学で在学生が毎年十人ほど日本に来ています。そういう学生からの多方面にわたる質問に答えるのも並大抵のことではありません。ですから先生の研修を強化しなければなりませんし、日本に来られなくてもインターネットなどで最新の情報をキャッチしないと、本当に今の学生には対応できなくなると思います。

人と人とを結ぶ教師の役割

劉　中国からの国費留学生は毎年三五〇〇人派遣されていますが、中国大使館の教育参事官李東祥さんのお話では、来年度からは七千人まで増えるということです。これから日本と中国の交流はかなり盛んになるということです。今は政冷経熱と言われていますが、文化の方も政治にはあまり左右されないようです。日本と中国の関係は、さらによくなっていってほしいです。隣の国なんですからね。

佐治　仲良くしていくことがお互いの繁栄も導くと思うね。

李　それも教師の役割の一つだと思います。ただ言葉を教えるのではなく、中日関係や相手の国の考え方も含まれます。友好や平和は、今後は若い世代に担ってもらわなければなりません。ですから私も、中国では中国の学生に日本との友好を、日本では日本の学生に中国への友好を話題にしています。若い世代の真の友

好があってこそ、永遠の平和があるのです。

劉　やはりお互いが理解しあうことが大事です。中国人の学生が日本に来て「おかしい」と思うこともありますし、中国では通用しないようなこともあります。逆に、日本の学生が中国に行って「日本では通用しないことでも中国では通用するんだ」ということがあるから、お互いの文化的背景を良く知っていれば、お互いを理解することができるわけです。お互いに尊重しあっていけば、感情面でもよい関係になります。

では最後に諸先生方に一言ずつお願いいたします。

佐治　みなさんがおっしゃっているように、日本と中国の、人と人とが仲良くなってお互いに手を携えていかないと、この地球をうまく運行していくことはできないのではないか、アジアだけでなく全世界的に非常に大事なことだろうと思います。そのためにこそ、日本語教育も中国語教育も役に立つべきであろうと、それがこの会の結論であるようにさきほどから聞いています。

劉　おっしゃるとおりです。佐治先生は単に大平学校の主任だったわけでなく、民間大使の役割も果たされたのだと思います。本当に感謝しております。

顧　私たちが教材を作る時、作成者の半分くらいは佐治先生の教え子でした。ですから、この教材の企画者の一人として、まず、佐治先生に感謝の意を表したいと思います。これから中国人のための日本語教育が築かれていくと思います。またご指導のほどよろしくお願いいたします。

佐治　どうもありがとうございます。

劉　李先生、一言お願いいたします。

李　日本語の勉強とか、日本語教育の研究とか、本当に永遠にゴールがない学問だと思います。つまり常に学ぶものがあって、常に学ばないといい教師にはなれないとつくづく感じました。

佐治　その通りですね。

劉　諸先生方には、貴重なお話を聞かせていただきまして、私にとっても本当にいい勉強になりました。日本人学生に中国語と中国の文化を教え、中国人学生に日本語と日本の文化を教えている私たちが、手を携えてともに頑張れば、将来の中日関係、文化交流がさらに発展するのではないかと思います。本当にどうもありがとうございました。

（二〇〇六年三月二七日）